

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03197

研究課題名(和文) 隋唐燕楽歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的研究

研究課題名(英文) Study on Sui-Tang Yanyue lyrics approached from the Literary, and the Musicological standpoints.

研究代表者

長谷部 剛 (HASEBE, TSUYOSHI)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：50308152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、[1]「敦煌文献中の燕楽歌辞の訳注を作成する」、[2]「林謙三・遠藤徹の研究を最大限活用しつつ、その燕楽歌辞の音楽学的根拠を探る」、[3]「林謙三旧蔵の東アジア音楽研究資料の整理・研究」の三項目に分かれる。[1]については長谷部剛と橘千早で『雲謡集』の訳注稿を作成し、[2]については長谷部が中国語論文「古代日本樂府詩管窺」を發表し、平安期日本に伝来した中国俗楽とその歌辞との関係の一端を紹介した。[3]については、長谷部と山寺三知の共訳編による『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺』を刊行したほかには、遠藤徹が林謙三の催馬楽研究を斟酌しつつ、催馬楽資料の新たな発見と研究を進めた。

研究成果の概要(英文)：We studied this problem from three aspects:[1]Research on Dunhuang Quzici, [2] Musicological Research on Sui-Tang Yanyue lyrics based on the results of the research by HAYASHI, Kenzo and ENDO, Toru, [3]Reorganization of the musicological materials on East Asian Music of HAYASHI, Kenzo. [1] HASEBE, Tsuyoshi and TACHIBANA, Chihaya translated some Dunhuang lyrics from Yunyaoji into Japanese. [2] HASEBE published a paper titled as "Study on Yuefu of Mediaeval Japan", made it clear that Sui-Tang Yanyue was introduced into Japan and preserved. [3] HASEBE and YAMADERA Mitsutoshi translated HAYASHI Kenzo's Sui-Tang Yanyuediao Yanjiu into Japanese and published it and ENDO devoted further study on Saibara with consciousness of the results of the research by HAYASHI.

研究分野：中国文学

キーワード：隋唐燕楽 敦煌曲子詞 林謙三

1. 研究開始当初の背景

隋唐音楽は、雅楽(宮廷祭祀の音楽)・燕楽(雅楽以外の音楽)・清楽(漢魏六朝以来の非雅楽)・胡楽(非中華系の音楽)・俗楽(民間の音楽)の五種をあげることができる。このうち、燕楽は清楽・胡楽・俗楽の三種を内包するものであり、隋唐音楽の最も重要で複雑な範疇となっている。本研究の代表者・長谷部剛は、2002年度～2004年度科学研究費補助金・基盤(B)「六朝の楽府と楽府詩」(研究代表者:釜谷武志[神戸大学・文学部・教授])および2006年度～2009年度科学研究費補助金・基盤(B)「南北朝楽府の多角的研究」(研究代表者:佐藤大志[広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授])に研究分担者として参加、そしてさらに、2012年度～2014年度科学研究費補助金・基盤(B)「隋唐楽府文学の総合的研究」の研究代表者として、漢魏六朝以来の音楽とその歌辞(楽府詩)について研究を進めてきた。「隋唐楽府文学の総合的研究」では『旧唐書』音楽志の現代日本語訳と詳細な注釈を作成しつつ、西域の音楽を主とする非中華系の胡楽が燕楽(宴楽・讌楽)として玄宗皇帝によって重要視されたため、雅楽や清楽よりも唐代音楽をいっそう強く特徴づける存在となった過程の解明に取り組んだ。

ただ、「隋唐楽府文学の総合的研究」では『旧唐書』音楽志の解読によって「雅楽/燕楽」の関係について歴史的な位置づけを行うことができたものの、燕楽の実態、すなわち歌辞とその演奏形式について解明を進めることはできなかつた。なぜならば、燕楽は清楽・胡楽・俗楽の三種を内包する、極めて広範な音楽実態であり、さらに漢魏六朝以来の中華の音楽(清楽)と、非中華の音楽(胡楽)が相互に複雑に関係しあった内容を持つものであって、歌辞の整理・分析と、音楽の実態(楽律・楽調)の理解を、それぞれ別個に遂行し得たものの、歌辞と音楽を直接結びつけて理解するまでには至らなかつた。

2. 研究の目的

燕楽は極めて広範な音楽実態であるため、三年間では「隋唐燕楽歌辞の総合的研究」を遂行することは不可能と考えた。そこで、日本雅楽資料所載の楽曲と関係する、中国・隋唐燕楽歌辞に限定して研究を進める。陽明文庫蔵『五絃(琴)譜』、音楽書『教訓抄』(伯近真[撰]、1233年)や、古楽譜『三五要録』(藤原師長[撰]、13C)に記載される楽曲には、隋唐燕楽(唐楽曲)に由来するものが極めて多い。例えば、「破陣楽」「傾杯楽」「宗明楽」「王昭君」「飲酒楽」「韋卿堂堂」「上元楽」「武媚娘」「玉樹後庭花」「柳花苑」など枚挙に暇がない。これらの曲名や歌辞は、中国の資料として『旧唐書』音楽志や『教坊記』・『楽府雜録』・『楽府詩集』などにも著録されるが、何よりも重要なのが、日本雅楽資料所載の楽

曲は、敦煌文献中の燕楽歌辞にも見られるということである(任半塘[編]『敦煌歌辞総編』、上海古籍出版社、2006年)。

日本雅楽資料中の隋唐燕楽(唐楽曲)については、林謙三と、本研究の研究分担者である遠藤徹の研究成果がある。従って、本研究では、任半塘[編]『敦煌歌辞総編』が載せる燕楽歌辞について、まず文学的アプローチによって現代日本語訳および詳細な注釈を作成し、さらに林謙三・遠藤徹の日本雅楽研究の成果を最大限活用しつつ、その燕楽歌辞の音楽学的根拠を探る(音楽学的アプローチ)ことを目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法については、以下の3種を準備した。

- [1]敦煌文献中の燕楽歌辞の訳注を作成する。
- [2]林謙三・遠藤徹の日本雅楽研究の成果を最大限活用しつつ、その燕楽歌辞の音楽学的根拠を探る。
- [3]林謙三旧蔵の東アジア音楽研究資料の整理・研究。

そして、この3種について以下のような研究体制をとった。

- [a]研究代表者:長谷部剛(専門領域:唐代詩歌研究) 研究項目[1][2][3]
- [b]研究分担者:山寺三知(専門領域:中国古代音楽研究) 研究項目[2][3]
- [c]研究分担者:遠藤徹(専門領域:日本雅楽研究) 研究項目[2][3]
- [d]研究分担者:橘千早(専門領域:敦煌文学研究) 研究項目[1]

[1]については、研究代表者の長谷部が、研究分担者の橘千早とともに、敦煌文献中の燕楽歌辞について日本語訳と詳細な注釈を作成した(文学的アプローチ)。これは、現在休止中の敦煌作品研究会『敦煌作品研究』の学術活動を継承するものである。そして、そこで得られた成果・知見を[2]「隋唐燕楽歌辞の音楽学的根拠」へと反映させることを試みた。長谷部と山寺は、2006年以来、科研費「南北朝楽府の多角的研究」・「隋唐楽府文学の総合的研究」で、詩歌と音楽に関する研究を共同で進めてきた。これまでの共同研究で、隋唐燕楽の歌辞を整理・分析し音楽の実態(楽律・楽調)を解明してきたが、歌辞と音楽を直接結びつけて理解するまでには至らなかつた。そこで、本研究では、新しく日本雅楽の研究者であり『平安朝の雅楽 古楽譜による唐楽曲の楽理的研究』(東京堂出版、2005年)の著書のある、遠藤徹を共同研究者として迎え、より専門的な音楽学的見地から、日本雅楽資料所載の唐楽曲(隋唐燕楽)とその歌辞との関係性について探究することを

構想した(音楽学的アプローチ)。具体的には、任半塘[編]『敦煌歌辞総編』が載せる燕楽歌辞について、楽律・楽調を推定し復元楽譜に歌辞を配するなど、音楽学的根拠を探る研究を試行した。

遠藤徹の研究分野は20世紀中期に林謙三が開拓したものである。今回、林氏旧蔵の音楽研究資料および未発表原稿が関西大学図書館に収蔵されることとなったが、これらの整理・解題等の研究的作業([3])は、長谷部以外には、これまで長谷部とともにこの作業に当たってきた山寺と、研究面で林謙三の後継者とも言える遠藤徹をおいて他にない。林謙三が収集した江戸時代の雅楽資料は極めて重要なものがある(『長谷川生問答』『新撰龍吟抄要録 高麗曲譜』『催馬楽古詠』『旋宮図解』および西四辻家〔綾小路家〕伝来の雅楽資料など。特に『新撰龍吟抄要録 高麗曲譜』は高麗楽に関する第一級の資料)。これらを長谷部・山寺・遠藤の三者が整理・研究し、その学術的価値を日本のみならず中国の学術界にも発信する準備を進めた。

4. 研究成果

上述の通り、本研究「隋唐燕楽歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的研究」は、[1]「敦煌文献中の燕楽歌辞の訳注を作成する」、[2]「林謙三・遠藤徹の日本雅楽研究の成果を最大限活用しつつ、その燕楽歌辞の音楽学的根拠を探る」、[3]「林謙三旧蔵の東アジア音楽研究資料の整理・研究」の三項目に分けて研究を進めた。[1]については長谷部剛と橘千早で『雲謡集』のいくつかの歌辞について訳注稿を作成し、[2]については長谷部が中国語論文「古代日本樂府詩管窺」を発表し、平安期日本に伝来した中国俗楽とその歌辞との関係の一端を紹介した。[3]については、長谷部と山寺三知の共訳編による『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺』を刊行し、『隋唐燕楽調研究』の日本語訳を発表したほかには、遠藤徹が林謙三の催馬楽研究を斟酌しつつ、催馬楽資料の新たな発見と研究を進めた。

本研究の最大の成果は『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺』を公刊したことであるが、それ以外にも、遠藤徹が林謙三の催馬楽研究を援用しつつ「江戸時代の催馬楽再興 綾小路俊宗と毛利壺邸」と題する研究成果を発表する(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター公開講座、2017年3月5日)など、着実に成果を上げた。

特筆すべきは、林謙三の東アジア音楽研究資料の整理・研究を主軸に置いた一連の研究成果が日中両国の中国文学研究・伝統音楽研究の領域において最先端をいくものとして注目を浴びたということである。具体的に例を挙げれば、長谷部と山寺三知が発見した林謙三の未発表原稿「唐楽調の淵源」は、『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺』に収録

されて公刊されたあと、上海音楽学院の教授から中国語翻訳の申し出があった。さらに、長谷部が林謙三の陽明文庫蔵『五絃(琴)譜』解読を援用しつつ発表した「敦煌歌辞と日本を結ぶもの」(『和漢比較文学』57、2016年)は、復旦大学の教授から中国語翻訳の申し出があり翻訳作業を進められている。林謙三の東アジア音楽研究は1930年代から1970年代になされたものであり、すでに半世紀以上の時間が経過しているが、未発表原稿の存在が象徴するようにその多くは注目されぬまま現在に至っており、さらにそれらを21世紀において整理・再構築することは、東アジアの古典文化を研究する領域において、日本・中国両国間で質的に深く量的に規模の大きな相互交流が可能となった現在であるからこそ、大きな意義を持っていることは疑いを容れない。

本研究の実施期間中の2017年9月、林謙三のご遺族は、これまで長谷部・山寺両名に閲覧を許可されておられなかった新資料を新たに提示された。その新資料のなかには、林謙三が記した1948年より始まる正倉院楽器調査の詳細な日誌や、未発表原稿「天平の音楽を探る」など、本研究にとって極めて貴重な資料が含まれているばかりか、「東洋音楽学会」の創立メンバーからの林謙三宛書簡も多くあり、これによって1940年代から70年代にかけての東アジア音楽研究の動向までも伺い知ることがわかった。さらに、2017年9月に先だつて長谷部・山寺両氏は、林謙三の「催馬楽研究」も入手している。これは林謙三が生前に執筆・完成させた原稿を、東京芸術大学大学院での演習のなかで、担当教員が大学院生とともに「催馬楽研究」手稿をワープロ原稿へと打ち直したものである。「催馬楽研究」は結果的に公刊されぬまま現在に至っているため、本研究で発見したこれら新資料については、学術的内容を改めて検討したうえで、可能であれば公刊の準備を進めたいと考えている。

これら林謙三の未発表原稿「天平の音楽を探る」「催馬楽研究」を整理・研究することを通じて、中国・隋唐期に歌唱された詩歌「樂府歌詩」「燕楽歌辞」、および、日本・平安期に民謡を雅楽風に編曲した「催馬楽」について、その歌唱の実態および音楽的淵源を解明する基盤が整えられたことも、本研究の成果として特に記すべきことと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

1. 古代日本樂府詩管窺、長谷部剛、《樂學》査読有 第17輯掲載予定 頁数不暇(2018年)

2. 敦煌曲子詞訳注稿(一) 『東西学術研究所紀要』、長谷部剛、橘千早、査読有り、第 51 輯、pp.1~11 (2018 年)

3. 蘇軾の詞の形式に対する初歩的な考察
慢詞「哨遍」「水調歌頭」「滿庭芳」を手がかりとして、橘千早、『風絮』、査読有、第 14 号、pp.1~25 (2017 年)

4. 林謙三著、山寺三知翻刻・校訂「唐代南詔奉聖楽について」、山寺三知、『國學院大學北海道短期大学部紀要』、査読無、第 34 卷、pp.1-12 (2017 年)

5. 敦煌俗楽の復元試論 歌詞の四声と旋律との関連性を探る、橘千早、和漢比較文学、査読無、第 57 号、pp.28-45(2016 年)

6. 敦煌歌辞と日本を結ぶもの、長谷部剛、和漢比較文学、査読無、第 57 号、pp.17-27(2016 年)

7. 森槐南《古詩平仄論》及其實踐、並論槐南對龐德《國泰集》的影響 森槐南札記二則：以《古詩平仄論》及《國泰集》為例、長谷部剛、中国文学学報(北京大学中国語言文学系香港中文大学中国語言及文学系)、査読有、第 7 期、pp.161-181 (2016 年)

8. 林謙三と郭沫若：『隋唐燕楽調研究』誕生秘話、山寺三知、國學院雜誌、査読無、第 117 卷 11 号、pp.331-356 (2016 年)

9. 日本詩歌集錦『和漢朗詠集』與初唐詩流傳情況、長谷部剛、中文學術前沿(浙江大学出版社)、査読有、第 9 輯、pp.56-62 (2015 年)

10. 校点『筆記律呂新書説』(附訓読)(四)、山寺三知、國學院大學北海道短期大学部紀要、査読無、第三十三卷、pp.1-24 (2015 年)

11. 校点『筆記律呂新書説』(附訓読)(三)、山寺三知、國學院大學北海道短期大学部紀要、査読無、第三十二卷、pp.1-31 (2015 年)

12. 蔡元定《律呂新書》版本問題初探、山寺三知、黄鐘大呂(陳応時、権五聖主編)、査読無、上巻、pp.315-321 (2015 年)

13. 《隋書・音楽志》標点瑣議、山寺三知、黄鐘大呂(陳応時、権五聖主編)、査読無、上巻、pp.1237-1244 (2015 年)

14. 日本对唐朝音楽理論的接受与吸收、遠藤徹、黄鐘大呂(陳応時、権五聖主編)、査読無、上巻、pp.94-105 (2015 年)

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 唐笛師平群秀茂注進の目録について、遠藤徹、東洋音楽学会東日本支部第 101 回定例研究会、共立女子大学、2018 年 2 月 3 日(東京)

2. 古代日本樂府詩管窺、長谷部剛、樂府學第三屆年會暨第六屆樂府歌詩國際學術研討會、江蘇師範大學、2017 年 10 月 20-23 日(中国)

3. 櫻井利佳、スティーブン・G・ネルソン、遠藤徹、Reappraising the Early History of Gagaku and Shomyo: Reception and Adaptation of Music from Asian Mainland in Ancient and Medieval Japan、The 20th Congress of the International Musicological Society、東京芸術大学、2017 年 3 月 22 日(東京)

4. 以四声分析为线索论词之产生及其发展形态、橘千早、2016 年詞学國際學術研討会、2016 年 8 月 28 日(中国河北省・保定)

5. 招待講演「笙の「入調」をめぐる一考察」、遠藤徹、中国と東アジア國際古譜学シンポジウム、上海音楽学院、2016 年 4 月 17 日(中国)

〔図書〕(計 3 件)

1. 林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺、長谷部剛、山寺三知、関西大学出版部、pp.1-374 (2017 年)

2. 美しき雅楽装束の世界、遠藤徹、青山信二、淡交社、p.1-97 (2017 年)

3. 『隋書』音楽志訳注、大形徹、狩野雄、釜谷武志、川合安、佐竹保子、佐藤大志、長谷部剛、林香奈、柳川順子、山寺三知、笠間書院、pp.1-530 (2016 年)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷部 剛 (HASEBE, Tsuyoshi)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：50308152

(2) 研究分担者

山寺 三知 (YAMADERA, Mitsutoshi)
國學院大學北海道短期大学部・国文学科・
教授
研究者番号：70352507

遠藤 徹 (ENDO, Toru)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：10313280

橘 千早 (TACHIBANA, Chihaya)
関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員
研究者番号：60765410

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()